

福祉の未来を拓くために

「福祉の未来を拓く」と銘打った「社大福祉フォーラム2019」つまり「第58回日本社会事業大学社会福祉研究大会」は、画期的な研究大会となった。もちろん、この研究大会は「令和」に改元されてから初めての大会という記念すべき大会である。

とはいえ、「令和」と改元されたことが、歴史の時代区分にとって、どれほどの意味があるかどうかはわからない。しかし、「平成」から「令和」への移行が、歴史の女神の悪戯で、一つの時代が終わり一つの時代が始まる歴史の画期と重ね書きとなっていることを、誰もが実感しているはずである。

この歴史の画期に開催される第58回の研究大会の大会テーマを、「人に向きあうソーシャルワーク—いま日本の福祉を考える—」と設定し、基調講演を潮谷義子前日本社会事業大学理事長にお願いすることにした。歴史の画期に際して、日本社会事業大学の社会福祉大会で現在の日本の社会福祉のアジェンダを取り上げ、「いま日本の福祉を考える」ことは当然のことである。

しかも、この歴史の画期に「福祉の未来を拓く」ことを目指そうとすれば、社会福祉の「原点」を確認しながら、福祉の未来への海図を描かなければならない。そこで潮谷前理事長に、「命と向きあう」をテーマに「社会福祉の心」を熱く語っていただくことにしたのである。

「人に向きあうソーシャルワーク」それ自体は自明の理である。人に向きあわないソーシャルワークとは、論理矛盾というよりも言語矛盾だからである。とはいえ、敢えて「人と向きあうソーシャルワーク」というアジェンダを掲げたのは、この歴史の画期にソーシャルワークが向きあう必要のある社会問題を浮き彫りにしたかったからである。

日本社会事業大学が創立された頃の社会問題は、貧困あるいは欠乏から現象していたといつてよい。ところが、現在の社会問題は虐待、いじめ、ひきこもりなどの社会的病理現象として投げかけられてくる。もちろん、それはソーシャルワークが向きあう課題が、時代の画期とともに大きく変容していることを雄弁に物語っている。

しかし、ソーシャルワークあるいは社会福祉には忘れてはならない心がある。それは人間の存在の必要性を相互確認することである。つまり、いかなる人間も存在していることが必要だということを、社会の構成員が相互に確認しあっていることによって、人間の社会は形成されているということである。

「人に向きあう」とは人間の必要性の相互確認を背後理念としている。それは人間が温かい手と手をつないで生きていく社会的存在だという理念だと表現してもよい。こうした理念は歴史が転換しても見失ってはならない真理である。

ヘーゲルの口真似をすれば、「ミネルヴァの梟は迫り来る夕闇とともに初めて飛び始める」という名句どおりに、私たちは一つの時代が終わり、一つの時代が始まる転換期に生きている。終ろうとしている

時代は、重化学工業を基軸としている工業社会であり、始まろうとしている時代は知識集約産業やサービス産業を基軸とするポスト工業社会である。

工業社会は重化学工業化によって高度成長を実現し、貧困や欠乏を歴史の表舞台から退場させたかのように見える。ところが、重化学工業化が資源制約から行き詰まると、ポスト工業社会へと舵を切るのではなく、人間の社会のあらゆる関係性を、市場関係へ置き換えることが推進されてきた。そのため社会的存在としての人間の関係性が破壊され、社会的病理現象が噴出してしまったのである。

「人に向きあう」とは潮谷前理事長が指摘するように、「時代に向きあう」ということでもある。今回の画期となる社会福祉研究大会の成果が「福祉の未来を拓く」ための導き星となることを願うばかりである。

2020年 1月

日本社会事業大学社会福祉学会会長

日本社会事業大学学長

神 野 直 彦